

第 25 回（2013）年度 小泉文夫音楽賞受賞記念講演

◆無断引用転載禁止◆

ポスト産業化時代の民族音楽学

ロベルト・ガルフィアス

（カリフォルニア大学アーヴァイン校教授）

東京 2014 年 5 月 15 日

こんばんは。せっかく柘植元一先生から素晴らしいご紹介を戴いたので、好い印象を壊さぬよう、何もお話ししない方が良さそうです。今回の受賞を大変光栄に存じます。長い人生には色々と楽しい時もありましたが、小泉賞の受賞は比類ない名誉で、想像すらしていませんでした。

私の拙い日本語をお許してください。素晴らしい考えをお話ししたいのですが、日本語が下手なので。九つの言語を話すのに、どれも上手くはありません。自分の考えを良い日本語で表せそうに思っても、その通りお話できそうにないのですが、今回は日本語でベストを尽くしましょう。



私は小泉さんと繋がりががあります。柘植さんと私と小泉さんは同世代の研究者です。小泉さんと一緒に写っているのが私です。若いですね。自分でもまるで別人のように思えますが、小泉さんと私は確かに同世代です。

民族音楽学はかなり新しい学問で、第二次世界大戦の少し前にヨーロッパで始まりました、第一世代の研究者は、大半が文献と二次資料に依存し研究を行いました。当時

は録音がとても少なく、研究者はこれらの録音を聞き、自身の理解に基づいて論文を書きました。第二世代の民族音楽学者には、研究対象とする音楽にじっくり取り組み、実際に演奏を学ぶ傾向が出てきました。当初、彼らの大半は作曲家か演奏者として研究に着手しました。このため、彼らは、自分が学ぶ音楽の演奏とその構造の理解を主な目的とし、おのずと自身で直接調査を行うことになったのです。

ちょうどその頃、私は雅楽を学ぶため 1958 年に日本を訪れました。いっぽう小泉さんは、その頃

インド留学中でした。我々二人は、同時期に同じ研究を進めていたのです。それで小泉さんが帰国すると、我々はすぐ連絡をとりました。私たちは考え方も目的も共通していました。

皆さまにお話したい事が多々あります。私は、今までいろんな国で様々な文化を研究してきましたので。多くの地域で研究したとは言え、私の理解はまだまだ浅く、その点は不満ですが、致し方ありません。

本日、みなさまに何をお話すべきか考えた結果、今日の民族音楽学の状況を俯瞰する事にしました。

第一点。日本の状況は存じませんが、欧米では、多くの方が民族音楽学者は西洋音楽が嫌いだと思います。これは完全に間違いです。民族音楽学者は、西洋音楽が嫌いではありません。実際は、我々アメリカの大学教育のシステムで、殆どの学生に伝統的な洋楽と触れる適切な機会が欠けている点を批判すべきだと、私は考えます。アメリカの学生達は文学や歴史は学んでも、モーツァルト、ベートーヴェンのクアルテットや、他の西洋音楽の重要な作曲家の音楽を耳にする機会がないのです。学生達が西洋音楽を聴いたことがないのは、本当に残念です。恐らく日本はずっとましでしょうが、欧米では一般的な音楽教育のレベルがきわめて低く、嘆かわしい限りです。問題を広い視点から検討する研究者としては、こういう言い方で良ければ、西洋音楽の民族音楽学を学ぶべきではないでしょうか。音楽の研究者として、我々はグローバルな視点から課題にアプローチすべきです。

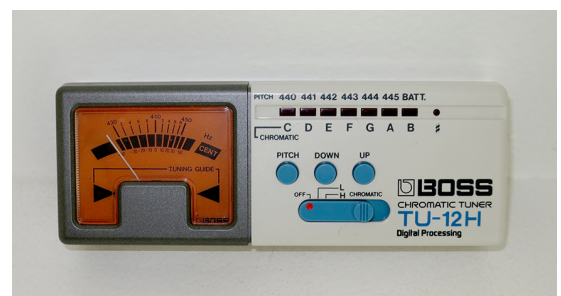
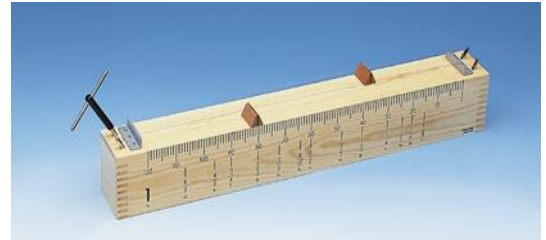
第二点。アメリカとヨーロッパのポップスは変わり映えしません。今では日本の **J-Pop** と韓国の **K-Pop**、そして新しい中国のポップスも同じになってしまい、それぞれに顕著な価値がありません。音楽的に同じで言葉が違うだけです。私はそれを良いとも悪いとも言うつもりはありませんが、この状態はバラの花の種類が次第に減って行くようなもので、もし最後に一つしか残らなければ、早晚バラは消滅するでしょう。生物学と同様に音楽でも、多様性の欠如は回避すべき重大な危機だと思います。

第三点。第2世代の民族音楽学者は直接音楽を学ぼうとしました。フィリピンのクリンタン音楽を実例として考えてみましょう。これは昔ミンダナオで私が録音したものです。注意深く聴き、耳がよければ、皆さんはこの演奏を五線譜で書けるでしょう。しかし、それは1回きりの演奏を書き取ったにすぎず、音楽の構造を何ら理解したことはありません。この音楽の演奏を実際に学ばない限り、それが短い旋律からなる楽句で構成され、楽句が組み合わさってグループを為し、演奏によって、更に長い楽節へと繋がることも、決して理解できないのです。ですから、演奏者が楽句Aを弾いてから、次にBに行き、その次はCに行くかAないしBを繰り返す。そして曲の最終楽句に辿りつくまで、自由自在に反復・



短縮し、短い旋律から成る何組もの楽句を演奏する。こんな構造を聴いただけでは理解できません。音楽を演奏することで構造の規範を学ぶのです。そうすると、構造は方向を指し示す地図のように立ち現れ、この地図を頼りに演奏者は色々な方向に動けるのです。一回きりの演奏を楽譜に記しても、ほんとうの音楽構造も、演奏者の考えも理解はできません。演奏してこそ理解できるのです。

第四点。テクノロジーも学問に影響を与えました。初期の民族音楽学は音階研究に専念し、それは慎重かつ科学的なものでした。世界の調律システムは恣意的ですし、その数も多く多様なので、初期の民族音楽学者はことなる調律方法の記録を始めました。この作業は、音程の計算より、まず音高を測定するなんらかの方法を必要としました。最初はモノコードが使われました。モノコードの弦はまず音叉で調律し、ついで、様々な音高の振動数を示す側面の数字に合わせて調律されます。しかし今日では、初心者がギターやヴァイオリンの調弦に使う、小さな装置があります。これはバッテリーで動き、調査地にも簡単に持ち運べます。この道具本来の目的ではないにせよ、音階研究には大変便利です。調査地での研究をずっと容易にしました。



同様に、録音も民族音楽学にとって初めから重要でした。世界が変化してテクノロジーが変化し、我々の暮らし方を変えたのです。テクノロジーの発展とメディアの普及は、ポピュラー音楽の普及も促しました。一方、伝統音楽は自力で生き残るしかありませんでした。伝播の高度なテクノロジーは多様性を妨げますが、我々は世界に一つしか新聞がなくなり、我々全員がたった一つのポピュラーソングを歌う日が来るとは、信じ難いことです。それでも、効率的なテクノロジーは選択肢の数を減らす傾向があるのです。

第五点は、教授と伝承システムの変化です。世界のほぼ全域で、インドでグルクラ・システムとして知られる音楽パフォーマンスのメソッドが伝えられてきました。日本の師弟制度のことです。師弟が一对一で十分に時間をかけ、伝統的な知の大きな総体を伝える理想的なやりかたです。全地域で必ずしもこの方法が用いられたとは限りませんが、音楽が、世界の最も伝統的な文化において教授されたことは、ごく普遍的な現象でした。この古い方法は今やあらゆる場所で消滅しつつあります。日本はむしろ例外で、三味線や箏の教授では、ちゃんとこのシステムが保たれています。この方法の利点は、師匠が一度にごく少数の弟子に集中できることです。しかし最近は大抵どこでも教授方法は様変わりし、伝統音楽は大学や音楽学院で大人数を相手に教えられています。もはやマンツーマンではなく、グループ授業です。ミャンマーでも韓国でも、バリ島ですら、音楽は学校の集団授業に負っています。もちろん沢山の人間に音楽を学ばせるのは良いことですが。





今日では、アメリカでもジャズを大学で教えます。私はジャズミュージシャンとして音楽を始めたので、この事がひどく奇妙に感じられます。昔はジャズを耳で聴き、他者と演奏して学び、そうやって即興も体得したものでした。今の学生も巧く演奏しますが、他者の即興は楽譜を読むだけで、自身も殆んど即興しません。沢山の人が音楽を聴く

耳を持っているのに、古いパフォーマンスの方法は失われたのです。先月メキシコでは、マリアッチの音楽を教える音楽院ができました。今まで、常にこの音楽は状況に応じて教授されてきたのですが。マンツーマンで伝えていた内容は、今ではシステム化され、耳で聴くより楽譜を読む方法にとって代わられたのです。理論と記譜法は音楽を進歩させません。音楽は聴かれるもので、楽譜を読むより耳で聴くことで享受されるのです。音楽の微妙なニュアンスや秘訣は、新しい教授方法では失われてしまうのです。

もう一つ例を挙げるなら、今日、我々が手にできる素晴らしい録音機器がありますね。しかし、至る所で素晴らしい演奏が行われていた民族音楽学の初期には、研究者は大きくて嵩張る録音機と、電気を確保するために発電機まで調査地に持ちこみました。今日、掌に乗るほど小型録音機で、とても鮮明な録音ができます。第二次世界大戦前にも、素晴らしい録音はなされていたのです、伝統的パフォーマンスは、今ではテクノロジーの影響を被った故に、昔を再現することは不可能です。ここで、北インドのトゥムリの歌の古い録音を聴いてみましょう。奏者はアブドゥル・カリム氏です。これよりもっと新しいトゥムリの録音もありますが、これらの古い録音の優雅さや気品に匹敵するものはありません。



韓国では、伽倻琴散調を即興できる奏者は皆無で、皆が録音され記譜された1～3パターンを演奏するのみです。私が韓国にいた1966年には、まだ数名は即興できました。たいへん残念なことです。

今日の欧米における民族音楽学はかなり難しい状況にあります。この学問は、そもそも音楽学校で初めて教えられるわけですが、言いかえると、音楽を西洋音楽と想定する学校で教えられる、ということなのです。これではまるで、地質学者が富士山を最も完璧な山ないし火山と決めて、地球の研究のために、他は見る必要がない。地質学は日本さえ研究すれば十分で、ほかに何も必要ない、というようなものでしょう。ですが、私達が音楽を客観的、科学的に研究したいと考えるならば、グローバルな視点から早急に研究すべきでしょう。世界の数多の伝統は、我々が気付かぬうちに消えつつあるからです。

もうずいぶん前の1966年、私はアイルランドのダブリンにあるアイルランド民俗委員会を訪ね、Seamus Delargy 会長と話をしました。彼は私にこう言いました：“アイルランドの家が燃えてい

る・・・、私はせめて家具数点だけでも救うつもりだ。”音楽の伝統が消えることは、熱帯魚に譬えられましょう。。我々は熱帯魚の色や動きを楽しみ、身近に置きたいと思いますが、餌を与えるのを忘れたとして、魚達は叫びもせず音もたてません。そして簡単に死に絶え、この世から消えてしまうのです。いったん死ねば、二度と生き返りはしません。もしかすると、コンピューターで熱帯魚を作れば便利で面倒もない、と考える人がいるかも知れません。



ん。しかし果たしてデジタルの魚が生きている魚と比べられるのでしょうか？音楽の伝統と同様、マスメディアが普及させた音楽は我々の目の前の要求は満たすでしょう。ですが、私達は消滅の危機に瀕した命ある古い音楽の伝統を大切にし、サポートし、生かし続けなければいけないのです。

私達より前のどの世代も、次の世代に手渡すべく、各世代の最上の物を保ってきました。それが文化なのです。私達の時代では、自分の文化を大幅に変えたり新しい物を加えてしまいましたが、我々より前の世代に対して、彼らが私達に遺してくれた物をちゃんと評価し、大事にすることが我々の責任なのです。